



TITLE:

前漢書貨殖傳に見はれたる經濟思想

AUTHOR(S):

穂積, 文雄

CITATION:

穂積, 文雄. 前漢書貨殖傳に見はれたる經濟思想. 經濟論叢 1939, 49(4): 606-619

ISSUE DATE:

1939-10-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131306>

RIGHT:

經濟學叢論 每月一日發行
第四十卷第四號 昭和十四年十月一日發行
大正四年六月二十一日第三種郵便物認可

東京帝國大學經濟學會 經濟叢論

第十四卷 第四號

昭和十四年十月

論叢

利率決定者としての銀行……………文學博士 高田保馬
調査論……………經濟學博士 蜷川虎三

時論

稅制改革論……………經濟學博士 汐見三郎
戰時統制經濟下の産業組合……………經濟學博士 八木芳之助

研究

前漢書貨殖傳に見はれたる經濟思想……………經濟學士 穗積文雄
聖トマスの共同體思想……………經濟學士 澤崎堅造
十九世紀末葉の人口論者ハンセンに就いて……………經濟學士 青盛和雄

說苑

貨幣數量説の諸形態とその吟味……………經濟學士 青山秀夫
十六世紀の原價計算……………經濟學士 岡本愛次

附錄

彙報

外國雜誌論題

(禁轉載)

研究

前漢書貨殖傳に見はれたる經濟思想

穗積 文雄

一

二十五史は史記の平準書、前漢書の食貨志以下、食貨志を設けて専ら經濟のことを取り扱ふを例とする。そしてそれが設けられてゐない場合は、例へば後漢書、三國志に食貨志を缺くも、次の晋書の食貨志は殆ど前漢書の食貨志を繼ぐと云ふ風である。だから食貨志は支那全史を貫く經濟の專編と云へる。然るに、同じく支那正史に於て見出される經濟の專編ではあるけれども、貨殖列傳はこれと趣を異にし、史記と史記を承ける前漢書にのみ存して他史に見るを得ない。そして史記貨殖列傳は主として周秦時代の人物を論じてゐるのであるが、もとく史記は筆を遠く黃帝に起して漢の武帝に擱いてゐるのであるからそれでよい。然るに前漢書は漢代の史實を扱ふ史書であるのかゝはらずその貨殖傳の貨殖傳たる所以の人物論に於て殆どこの史記貨殖列傳の原文を引用してゐること、まさに趙翼が、漢書所載貨殖。又多周秦時人。與漢無涉。殊亦贅設。¹⁾と評せる通りである。勿論、前漢書は漢代の史書であり史記は黃帝より漢の武帝に至る迄の史書であるから、漢の高祖より武帝に至るまでの歴

1) 趙翼，二十二史劄記，卷一，各史例目異同

史は史記、前漢書重複するわけであり、そしてその重複するところでは前漢書は史記の原文を引用すること多きこと矢張り趙翼が、漢書武帝以前紀傳。多用史記原文。惟移換之法。別見剪裁²⁾。と云へる通りである。然し、それは前漢書の取扱ふ内容たる漢代のことに屬するからまだよい。然るに貨殖傳に於ては前漢所の取扱ふ範圍の外に在る周秦時代を主とするにもかゝらず、なほこれを引くのは何故であらうか。

思ふに前漢書の撰者班固は儒教を奉ずる。然るに史記の撰者司馬遷はその父談の影響か黃老の思想に傾く。それは司馬遷が、今日その存在が疑問視せられ、その存在を肯定するとしてもそれは少くとも孔子の時代より以後の時代に屬せねばならぬとせられる老子を、孔子をして、鳥吾知其能飛。魚吾知其能游。獸吾知其能走。走者可以爲罔。游者可以爲綸。飛者可以爲矰。至於龍吾不能知其乘風雲而上天。吾今日見老子。其猶龍邪³⁾。と讃嘆せしめてゐるのによつてもわかる。從て司馬遷は必ずしも儒家の思想に拘束せらるゝことなく不羈奔放であるが、それは遊俠傳と貨殖列傳に於て特に甚しきものがあること貨殖列傳を評して、其縱橫白肆。莫知其端。與游俠傳。並稱千古之絕矣⁴⁾。となす者があるによりても察せられる。すなはちそれに於て司馬遷は後に述ぶごとく欲望を肯定し、利己心を是認し、富者を稱揚して措かざるものがある。これは儒教を奉ずる班固にとり容認する能はざるところでなければならぬ。かくて班固は司馬遷を評するや、其是非頗繆於聖人。論大道則先黃老。而後六經。序游俠則退處士而進姦雄。述貨殖則崇執利而羞賤貧。此其所蔽也⁵⁾。と憤激する。故に班固としては立つて此異端邪說を排撃して儒教の大義を宣揚することを以て重要な任務と爲したのではあるまいか。さすればそのためには史記貨殖列傳の内容を聖教の立場より再吟味することが必要であり、從て前漢書の取扱ふ範圍の如きは問題でない

2) 上掲書、卷二、漢書移置史記文
3) 司馬遷、史記六十三、老子韓非列傳第三
4) 史記評林、董份評
5) 班固、前漢書六十二、司馬遷傳第三十二

のであつて、そのためには、史記貨殖列傳を引くことが、「贅設」どころか喫緊事でなければならぬことになる。

かくて前漢書の貨殖傳は史記の貨殖列傳を儒教の立場から再吟味することに於て成立つ。そしてそのことはまた次のことを意味せねばならぬ。すなはち、前漢書貨殖傳は司馬遷が編した史記貨殖列傳に對する班固の批判に過ぎぬのであつて、從て先に二十五史中貨殖列傳は史記と前漢書にのみ存すると云つたが、實は貨殖列傳は司馬遷によりて編まれたるに留まると云ふべきであるかも知れぬ。そしてそれは司馬遷以外の人には貨殖列傳が編めなかつたのによるか、そも／＼またその後に至りては貨殖列傳に論ぜらるゝに足る人がなかつたによるか、それともかく實質上は貨殖列傳は司馬遷に撰せられたるにとゞまるとしても、形式上は前漢書に於てもまた貨殖列傳が見出される。

かくて史記と前漢書は經濟の專編である食貨志（史記にありては平準書）と貨殖列傳を具備する。そして私は史記平準書、史記貨殖列傳並びに前漢書食貨志に見はれたる經濟思想に就てはすでにいさゝか伺ふところがあつた。⁶⁾ だから私は今や残されたる前漢書貨殖傳に見はれたる經濟思想を伺ひ、よつて以て史記、前漢書に於ける經濟の專編に見はれたる經濟思想の考究を了することにし度いと思ふ。かくて私は本稿の筆を執る。

二

史記貨殖列傳は「議論未だ了らず、忽ち敘事出で、敘事未だ了らず、忽ち議論出で」その文「出入變化捉摸すべからざ」⁸⁾るものがあるが、しかもそれは結局司馬遷が自分の經濟思想を展開せる部分と列傳諸家を論評せる部分とより成立つとすることができる。だからこれを批判する前漢書の貨殖傳も自ら司馬遷の經濟思想の代りに班

6) 拙稿、史記平準書に見はれたる經濟思想（經濟論叢、第四十九卷、第三號）
拙稿、史記貨殖列傳論稿（支那研究、第二十二號）拙稿、前漢書食貨志論稿（支那研究、第二十四號）參照
7) 史記評林、王綏評
8) 史記評林、庚順評

固の經濟思想が展開せられる部分と殆ど司馬遷の文が引用せられてゐる列傳諸家の部分とより成り立つ。

從て前漢書貨殖傳を伺ふには順序として先づ班固が儒家の教説に基いて展開する經濟思想から始めねばならぬわけであるが、その爲にはそれを引き起こしたる史記貨殖列傳に展開せる司馬遷の經濟思想を一瞥することが必要であると思ふから今煩をいとはずこゝにそれを試みる。⁹⁾

司馬遷は劈頭先づ老子の無欲説を掲げてそれが空論に終りて遂に現實に行はれざることを喝破し、人間の欲望の抑壓すべからざるを洞察し、寧ろこれを自由に放任すべしと説く。從て欲望充足の具たる財貨の重要なことを認識し、因りてその生産に留意して分業論に到達し、分業成立の先行條件たる交換の成因もこれを自然に歸して、此寧ろ政教發微期會哉。と斷じ、各勸其業。樂其事。若水之趨下。日夜無休時。不召而自來。不求而民出之。豈非道之所符、而自然之驗邪。と云ふ。然らば自然は如何にして人を驅りて分業交換の社會を形成せしむるかと云へば司馬遷はそれは富を求むる人の性情、利己心に出るとして、それを或は、壯士在軍。攻城先登。陷陣却敵。斬將奪旗。前蒙矢石。不避湯火之難者。爲重賞使也。と云ひ、又は、今夫趙女鄭姬。設形容楔鳴琴。揄長袂躡利屣。目挑心招。出不遠千里。不擇老少者。奔富厚也。と云ふが如き華麗なる章句に託し、又は、天下熙熙皆爲利來。天下壤壤皆爲利往。と明快に論斷する。從てこれを抑壓するが如きは下の下策で、これに因りその行くに任すこそ上策なれとして、雖戸説以眇論。終不能化。故善者因之。其次利道之。其次教誨之。其次整齊之。最下者與之爭。と云つて所謂自由放任策を主張し、全く近世資本家的經濟思想の父と稱せられるアダム・スミスと符節を合はすがごとき見解を吐露し、かくて富を得たる者はまことに王侯とその樂しきをともにする者、素封

家の名に背かぬ者とこれを推重する。

そしてかくの如きこそはまさに班固が、崇執利。羞賤貧。とするところのもので、實に、其是非頗纏於聖人。として憤慨し、排撃するところとなるのであるが、然らば班固がこれに對して儒教の立場より展開する經濟思想は如何にあるであらうか。

班固がこゝに展開する思想は二段に分かれる。第一段は上代至治の狀態を説き經濟はかくあるべしと云ふ規範を示せるものであり、第二段は、この至治の狀態が衰廢するところに如何に混亂が生ずるかを示すことによりて前段の論議を強化せむとするものである。先づ上代至治の狀態に就いて説く所より何ふに、曰く「昔先王之制。自天子公侯卿大夫士。至于卑隸抱關擊柝者。其爵祿奉養宮室車服棺槨祭祀死生之制。各有差品。小不得僭大。賤不得踰貴。夫然。故上下序而民志定。」これによりてこれを見れば、班固の理想とするところは先王の制にあるのであつて、そこでは階級の別が嚴として存し、物質生活も亦それに應じて區別があり、小なる者が大なる者を僭するを得ず、賤しい者が貴い者を踰えることは許されぬ。かくて上下の順序が立ち、人の志も一定して浮動することがない。従て機に投じて富王侯と埒しく、諸侯と抗禮するが如きはこゝでは斥けられる。況や陳勝の徒の、王侯將相寧有種乎。のごときは以ての外のこととなる。

然らばそのような社會ではどんな經濟が営まれるかと云へば「於是。辯其土地川澤丘陵衍沃原隰之宜。教民種樹畜養五穀六畜及至魚鼈鳥獸蠶蒲材幹器械之資。所以養生送終之具。靡不皆育。育之以時。而用之有節。草木未落。斧斤不入於山林。豺獮未祭。罟網不布於壟澤。鷹隼未擊。矰弋不施於獲隧。既順時而取物。然猶山不糴藥。

澤不伐天。鰥魚鰥卵咸有常禁。所以順時宜氣。蕃阜庶物。稽足功用。如此之備也。」すなはち、そこでは自然環境の宜しきに應じて、民に生産を指導する。そして先づ原始生産業、すなはち農業、林業、牧畜、狩獵は、皆これを育成するにはその時期に従ひ、これを使用するには節度を失はず、自然の法則に順應して物を殖産し、かくて資材が充分に蓄積せられるように心がける。かくて原始生産業に於て資材の蓄積が成れば次は如何と云ふに、曰く、「然後。四民因其土宜。各任智力。夙興夜寐。以治其業。相與通功易事交利而俱瞻。」だから、原始生産業によりて資材がもたらされると、こんどは四民が分業により各その業に精勵し、そして交易によりて有無相通じ長短相補ひて何れも満足を得るとする。然らばかくの如きは如何にして可能であらうかと云へば、こゝでは司馬遷の文句をそのまゝ借り來つて「非有徵發期會」としてその自然に出づるを認むるのであるが、司馬遷が、若水之趨下。日夜無休時。不召而自來。不求而民出之。豈非道之所符。而自然之驗邪。とせるに對して班固は易を引いて「故易曰。后以財成。輔相天地之宜。以左右民。備物致用。立成器。以爲天下利。莫大乎聖人。」とすることに於て儒家の面目を發揮せるを見る。然し乍ら、ともかくも、かくて班固も生産に於て分業が必要であり、分業の行はれる爲には交換が成立せねばならぬ事を知り、そしてそれが發徵期會あるからでなくして事は自然に出づることを認むるのであるが、班固はさらに進んで分業に就いては古制を引いてそれを宛も理想として掲ぐるに似たるものがある。曰く、「管子云。古之四民不得雜處。士相與言仁誼於閒宴。工相與議技巧於官府。商相與語財利於市井。農相與謀稼穡於田疇。朝夕從事不見異物而遷焉。故其父兄之教不肅而成。子弟之學不勞而能。各安其居。而樂其業。甘其食。而美其服。雖見奇麗紛華。非其所習辟。猶戎翟之與于越不相入矣。是以欲寡而事節。財足而不

争。」すなはち、古の四民は雜處するを得ず、農は農と、工は工と云ふ具合に別々に業を以て集まり、從て御互にその仕事の話をしてその外のことを考へず、かくて子供の時分からその業とする方面の世界でのみ育つて行くのであるから、その業を習得することが容易であるとともに、外の世界に立ち入らぬのであるから新なる欲望を刺戟せられることも少い。だから寡欲で事節し、從て財の不足することなく、財が不足せぬから争の起ることもない。かく先づ民を富ませて、「於是。在民上者。道之以德。齊之以禮。故民有恥而且敬。貴誼而賤利。此三代之所以直道而行。不嚴而治之大略也。」と班固は考へる。すなはち、先づ富まして然る後にこれを教へ、而も、その教へるにあたりては、これを道くに政を以てし、これを齊くするに刑を以てする代りに、これを道くに德を以てし、これを齊くするに禮を以てする。すると民免れて恥なしと云ふこともなく、且つ富みて生活に餘裕あればそこに恥を知り且敬する心も自ら起り、誼を貴びて利を賤しむ氣風も生ずる、古への世に德禮を以て下を率ひ、僞飾せずして行はれ、嚴重に取締ることなくしてよく治つたと云ふのはまことにかくの如き状態であつたからであると云ふのである。

かくの如きがすなはち班固の所謂古の聖王の至治の状態であり、そしてそれはまた班固の經濟の理想である。そしてわれ／＼はそれに於てとくに經濟の重要性の認識を見出すことができる。けだし、經濟に就いて種々と論述をつくせるはこれ經濟を重んずるが故に外ならず、殊に財足而不争。於是在民上者。道之以德。齊之以禮。民有恥而且敬。貴誼而賤利。とするはまさに唯物史觀、經濟史觀に通ずるとさへ云へる。然し乍ら、班固は結局儒家である。儒家は經濟を道德に従屬せしめる。孔子も先づ富まして然る後に之を教へんといはれることに於て、

經濟の重要性を認められるけれどもそれはあくまで道德のための經濟であつて二者擇一の場合には勿論經濟を放棄せられる。¹¹⁾ 孟子も、有恒産者有恒心。無恒産者無恒心。苟無恒心。放辟邪侈。無不爲己。¹²⁾ と云ふてはゐるが、經濟と道德を並べるときは、何必曰利。亦有仁義而已矣。¹³⁾ と云ふ。かくて班固もなるほど經濟は重視するが、それは人が道德を行ひ得るがために物質生活が重大だとなすのにすぎぬ筈である。そしてそれは孔子が、飯蔬食。飲水。曲肱而枕之。樂亦在其中矣。¹⁴⁾ 又は、賢哉回也。一簞食。一瓢飲。在陋巷。人不堪其憂。回也不改其樂。賢哉回也。¹⁵⁾ に寡欲思想を示されるごとく、班固もまた、欲寡而事節。財足。と云ひ寡欲思想を抱くことなどよりしても容易に伺ふことができよう。

なほ、班固の理想とする先王の制はすなはちまた儒教の理想とするところであるが、それは少くとも班固の時代に在りては一のユートピアに外ならず、そしてそのユートピアはまたユートピアン、ソーシアリストの抱くそのれの範疇に屬するを知ることができる。¹⁶⁾ だからわれ／＼は先王の制に於て理想の經濟社會を見出し、その再現を熱望する彼の經濟思想に於て一のユートピアンソーシアリズムの思想を見ることになるわけである。

三

次に進んで第二段に入る。第二段は上代至治の状態が破綻し、從て混亂に陥ゐるとせられる場合であること先に關説したところであるが、然らばそれは如何にそうなるか、班固は曰ふ。「及周室衰禮法墮。諸侯刻桷丹楹。大夫山節藻梲。八佾舞於庭。雍徹於堂。其流至乎士庶人。莫不離制而棄本。稼穡之民少商旅之民多。穀不足而貨有餘。陵夷至乎桓文之後。禮誼大壞。上下相冒。國異政。家殊俗。奢欲不制。僭差亡極。於是。商通難得之貨。

10) 子適衛、冉有僕、子曰、庶矣哉、冉有曰、既庶矣、又何加焉、曰、富之、曰、既富矣、又何加焉、曰、教之、(論語、子路第十三)
11) 子貢問政、子曰、足食足兵民信之矣、子貢曰、必不得已而去、於斯三者何先、曰、去兵、子貢曰、必不得已而去、於斯二者何先、曰、去食、自古皆有死、民無信不立、(論語、顏淵第十二)

工作亡用之器。士設反道之行。以追時好而取世資。僞民背實而要名。姦夫犯害而求利。篡弑取國者爲王公。困奪成家者爲雄桀。禮誼不足以拘君子。刑戮不足以威小人。富者木土被文錦犬馬餘肉粟。而貧者短褐不完唅菽飲水。其爲編戶齊民同列。而以財力相君。雖爲僕虜猶亡慍色。故夫飾變詐爲姦軌者。自足乎一世之間。守道循理者。不免於飢寒之患。其教自上興。露法度之無限也。」すなはち班固によれば、周室衰微し禮法墮落して上述至治の制が崩解すると人々その分に安んぜずして身に過ぎたる奢侈を敢てするようになり、それは諸侯に始まり士庶人に及ぶ。そうすると從來の整然たる分業も最早やこれを維持することができなくなり、そこで人は勞多くして酬ゐられること少き農を去りて、安逸にして巨利を約束するかに見ゆる商業に走る。故に穀物が不足してその他の商品のみいたすらに有り餘ることとなる。而も他方に於ては階級秩序の紊亂は下剋上の勢を招來し、欲望を抑壓制限することなど全然行はれなくなつてしまふ。すると今や眼中利ありて他なき商人はそれが人々の爲であるか否かは措いて問ふところでなく、たゞこれら豪富者の欲望充足のために奔走して、珍什異寶の媒介に没頭して他を顧みないことになり、工人はまた工人で小數の富豪の無役の欲求に應ずることに急にして一般の人々が如何に切實な欲求を持つてゐようがそれを無視することになる。かくて百萬人が食ふに米なくして飢に泣く聲に耳を塞いで一人の富豪のために酒を作ることとなり、千萬人が衣るに布なくして寒えてゐる姿に眼を閉ぢて一人の富豪のために錦羅を織ることとなる。かくの如くして禮儀や制度が廢れて人々義を後にし、利を先にするに至れば利のためには放辟邪侈爲さざるなきに至るべく、禮儀は以て君子を拘束するに足らず、刑罰は以て小人を威壓するに足らず、豪富の者は贅澤の限りをつくし、貧窮の者は衣食さへ満足にかなはぬこととなる。かくて富が唯一の力と

12) 孟子、
13) 孟子、
14) 孟子、
15) 孟子、
16) 孟子、

上句、
上句、
上句、
上句、
上句、

參照 (支那研究・第二十四號)

なり、富さへあればよいと云ふこととなり、如何なる行爲によるも富を握るがかりで、下手に道理など守つてゐれば飢餓の患を免れぬことになる。

かくの如きがすなはち班固が至治の制の廢墟に出現する混濁の世とするところであるがわれ／＼がそこに見るものはまさに極端なる營利主義の社會でなければならぬ。従て上代至治の世と對照して末世澆季の世を示すことによりて先の儒家經濟思想の壯嚴さを示し、よりて以て史記貨殖列傳に見られたる司馬遷の經濟思想を克服せむとする班固に於て私は營利主義に對する厚生主義、個人主義に對する共同體主義の思想を見ざるを得ない。

四

かくてこの立場から班固は愈貨殖者の列傳に入ることになるのであるが、それは先に述べたごとく、殆ど史記貨殖列傳の引用である。司馬遷が前述のごとき經濟思想を展開せる後に引き續いて論評せる貨殖者の列傳を班固が上述のごとき經濟思想を展開せる後に引用する時は、そこにちぐはぐなものを感ぜしむるもの少からざること
は否定すべくもない。勿論班固は史記の原文を引用するに當りて全然原文のまゝと云ふのではなく、少しく手を入れてはゐる。然らば如何に手を入れてゐるかと云へば、字句の枝葉末節の差異を問題外におけば、それは史記の原文を簡略化せるか、または司馬遷との思想の相異より来る修正、すなはち削除か補足である。いま史記貨殖列傳に就いては、私は既にいさゝか論じたことがあるから、こゝではこの班固が手を入れた點に焦點を合はせて見てゆくこととする。

そうすると先づ問題になるのは計然である。史記貨殖列傳に於ては、計然曰。知園則修備。時用則知物。二者

形則萬貨之情可得而觀已。と計然の景氣變動論を敘したる後、進んで、故歲在金穰。水毀。木饑。火旱。旱則資舟。水則資車。物之理也。六歲穰。六歲旱。十二歲一大饑。とその景氣循環理論を細敘してゐるが班固は、旱則資舟。水則資車。のみ引いて、故歲在金穰。水毀。木饑。火旱。並びに、六歲穰。六歲旱。十二歲一大饑。は削除する。又史記貨殖列傳にては計然の思想として更に、夫糴二十病農。九十病末。末病則財不出。農病則草不辟矣。上不過八十。下不減三十。則農末俱利。とその物價調節論、市場價格説、自然價格説を含む句を掲げてゐるが、前漢書貨殖傳はこれを載せぬ。そしてその理由は簡略のためとしておくがまづ無難であらうが、然し乍らたとへそれが簡略のためであるとしても、それは少くとも簡略のためにはこれを削除してよいとせられたるわけであり、そのことはそれらのものがあまり重要性を認められなかつたからであると云ふことを否めないのではないか。然るに私の見るところによればこれらのものは實は經濟思想としては極めて重要なものであること贅言を要せざるところに屬し、從てその重要性を認識する能はざりしことは班固の經濟思想のためまことに惜むべきところであり、そしてそのことはまた前漢書貨殖傳に見られたる經濟思想の弱點でなければならぬ。

次で子贛に就いては史記にありては、原憲不厭糟糠。匿於窮巷。子貢結駟連騎。束帛之幣。以聘享諸侯。所至國君。無不分庭與之抗禮。とて子贛と孔子の愛弟子原憲とを比較して子贛の羽振りのよいところを敘したる後に、百尺竿頭更に一步を進めて、夫使孔子名布揚於天下者。子貢先後之也。此所謂得勢而益彰者乎。と斷じ、孔子の有名になることができたのも金持の子貢と云ふ弟子があつたからだと云ふ大膽なる論斷をなせるに對して、前漢書に在りては、同じく、子贛結駟連騎。束帛之幣。聘享諸侯。所至國君。無不分庭與之抗禮。と敘してゐる

けれどもその後の方は司馬遷と撰を異にして、「然孔子。賢顔淵而譏子貢。曰回也其庶乎。屢空。賜不受命而貨殖焉。意則屢中。」と孔子の言を引いてゐるが、それはすなはち先にも述べたる儒家思想の特徴たる賤物質賤勞働思想であり、そして經濟思想としては消局的の譏を免がれぬものなること敢て多くを語るまでもないであらう。

次は白圭であるが、李克（惲）が盡地力の教により生産論を展開せるに對して白圭は需要供給の法則によりて流通論を開拓せることを注意すること史記貨殖列傳そのまゝであるが、その際、夫歲孰。取穀予之絲漆。蠶出。取帛絮與之食。の句は單に白圭樂觀時變。故人棄我取。人取我予。の句の説明にすぎぬ故これを省略に附せるは單に引用の簡單化に歸するだけで済ましてもかまはぬと思ふけれども、史記にて、太陰在卯穰。明歲衰惡。至午旱。明歲美。至酉穰。明歲衰惡。至子大旱。明歲美。有水。至卯積著率歲倍。と計然の景氣循環説と同じ範疇に屬する彼の景氣論を述べたる條が、前漢書に於ては計然のそれと同じく削除の運命に陥れることに就きては、先に計然のところで述べたことがこゝにも適用せられねばならぬ。

更に又、司馬遷は白圭を稱揚して、白圭其有所試矣。能試有所長。非苟而已也。と評してゐるが顔淵を推して子貢を斥ける班固が白圭に對するかくのごとき讃辭を抹殺せることは敢て怪しむを要せぬであらう。

なほ、史記貨殖列傳に於ては吾治生産。猶伊尹呂尚之謀。孫吳用兵。商鞅行法。是也。と生産の文字を見るが、前漢書貨食傳に在りては、これが單に、吾治生云々。となりて生産の語が見られぬ。もとより今日の生産なる語は近世に入り歐洲經濟學の輸入以來、我國に於てその Production に對する譯語として使用せられたる語であるから、史記にその意味の生産の語が使はれてゐるとかゝる云々するがごときは、凡そ意味がないと云へば云へるかも知れぬが、然し乍ら、現代の經濟學上に於ける Production の譯語として使用せられたる生産なる語が史、漢の時代に既に早く存在してゐたか否かは必ずしも重要ならざる問題であると

云ひ切れるものでもあるまいかと思ふ。そして私はこゝでも司馬遷の方が現代經濟思想に近い思想の把持者であることを感ぜざるを得ぬ。

次に史記貨殖列傳に於ては、烏氏蠡(俛)や巴の寡婦清やを敍して、夫。俛鄙人牧長。清窮鄉寡婦。禮抗萬乘。名顯天下。豈非以富邪。と評してゐるが、班固がかくの如き評を抹殺してゐることも最早や不思議とするに足らぬであらう。

かくて又、史記貨殖列傳中でも特に雄渾なる文章を以て海内の士俗を論ずる部分や、かの華麗無比の章句に託して經濟的動機が百行の基なる所以を力説する部分を班固が引用せぬはあたりまへであらう。況や司馬遷が、是以無財作力。少有鬪智。既饒爭時。此其大經也。今治生。不待危身取給。則賢人勉焉。是故本富爲上。末富次之。姦富最下。無巖處奇士之行。而長貧賤。好語仁義。亦足羞也。と言へるところなどを引用せぬはもとよりである。

それから史記貨殖列傳に於ては最後に、「請ふ略當世千里の中、賢人の富める所以のものを道ひて後世をして以て觀擇せしめん」とて多數の富豪をあげ、而もその終りには或は冢を掘り、或は搏戲し、または微賤な業をこゝとして富豪となれる者を列舉し、非有爵邑奉祿。弄法犯姦而富盡椎埋(推理)。去就與時俯仰。獲其贏利。以末致財。用本守之。以武一切。用文持之。變化有概。故足術也。とし「富に經業無く、貨に常主無く、能力ある者が金持ちとなり、瓦解する者は不肖者であるとなし、千金之家比一都之君。巨萬者乃與王者同樂。豈所謂素封者邪非也。と全編を結ぶに對して、班固はそれら豪富者に就いて往々史記の敍述に更に加筆するに彼等の衰亡を以てし、殊にその最後を、「曲叔稽發雍樂成之徒。猶復齒列。傷化敗俗。大亂之道也。」と結ぶ。かくて班固はあくまで儒家者流の立場に立ちて司馬遷の貨殖列傳を修正するを見る。

五

司馬遷は史記貨殖列傳に於て欲望を肯定し、富を尊崇し、生産的勞働を重視し、利己心を是認し、自由政策を主張する。これは儒教を奉ずる班固から見れば、其是非頗繆於聖人。全く、異端邪說である。そこで班固は前漢書に於て貨殖傳を設けて儒家の立場からこれを修正する。そしてそれはまことに堂々たる經世の大文字たるを失はない。特に儒家者流から見る時は、恐らくはこれによりて異端影をひそめ、聖教光を加へ、宛も暗雲一掃せられて天日を見るの思があるであらう。然し乍らこれを經濟思想の立場から見るとはその趣は必ずしも同じきを得ない。けだし、儒教は經濟を否定するとは云はぬがこれを重視するとは考へられず、それは賤物賤勞の思想を藏し、從てそこは經濟思想の花を咲き誇らしむる溫床とは思へない。史記貨殖列傳の異端邪說が克服せられたるときそこに咲き誇るみごとな經濟思想の花が凋落せねばならぬことは争へぬところであらう。

然し乍らまた、儒教の賤物、賤勞は賤物賤勞のための賤物、賤勞ではない。それは實に聖賢の道、仁義の教に對しての賤物、賤勞である。經濟を重んぜざるに非ず、道德を重んずること更に大なるが故である。換言すればそれは經濟の道德への從屬に外ならぬ。然るにその道德社會の典型は上代先聖の至治の制であり、そしてそれは所謂ユートピアの範疇に屬せしめられると考へられ、從て班固の前漢書貨殖傳に見られたる經濟思想はユートピアンソーシアリズムと解することができる。そしてそう解することができるとすれば司馬遷の經濟思想とこれを排撃する班固の經濟思想はこれを大きく個人主義經濟思想と社會主義經濟思想の對立に於て把握することができる、そして私はそこに思想推移の跡の東西に互りて同じく古今を通じて變はらざるを見ることに於て無限の興趣を感じつゝ本稿の筆を擱く。

(昭和十四年九月六日)